

藤川実践【2年 学級創造活動】

～「なぜ？」が続くために～



本実践の主張点

学級創造活動において個人追究を持続させるために、

方策Ⅰ 子どもが試行錯誤する場面での、共感・協同につながる効果的な支援を行う。

方策Ⅱ 子どもの問いを持続させるための評価方法を工夫する。

藤川提案では、学級創造活動において個人追究が持続するための鍵を「問いの連続性」と捉え、そこにつながる手立を中心に論が展開されている。

共感・協同につながる効果的な支援について

本提案では、子どもの個人追究への意欲を継続させるためには、個々が内容や方法を追究する過程において、共感・協同の意識が必要不可欠である、という考えから論が展開されている。藤川実践では、個人で課題を追究することが難しくなった児童に焦点を当て、そういった悩みを解決するための方策を集団で考えていくという場面を設定することで、共感的・協同的な学びの重要性について改めて示そうとした。確かに、“All For One”の精神は支持的な学級風土の形成に欠かせない視点であり、そういった温かさがあることで子どもは安心して問題解決を進められるとも言える。ただ、本時においては共感的・協同的な問題解決の場面が個人追究の意欲を高めるために設定されていたというよりは、それ自体が目的化されていたようにも感じられた。つまり、「XのためにAをBする」という提案において、「X＝自分にとって意味のある価値を創造する」ということがいつしか置き去りにされ、「X＝共感的・協同的な態度を育む」という視点が示されたがために、追究過程においても振り返りの場面においても価値の存在が見えにくかったのではないかとと思われる。

個人追究を核とする学級創造活動における共感的・協同的な意識とは、単に友達の活動について興味をもち、似た活動を行ったり、共に活動しようとしたりするという捉えではなく、あくまで個人が自分の活動に没頭したからこそ生まれてくるものであると考える。自分ができる限界まで悩み、葛藤し、成功や失敗を繰り返すという時間があるからこそ、子どもは頑張った自分や多様な他者の存在を認め、そのよさを受け入れようとするのではないだろうか。学級創造活動における資質・能力の育成については、今後また改めて考えていく必要がある。

子どもの問いを持続させるための評価方法について

学級創造活動において、子どもの個人追究の意欲を継続させるために「問い」に着目して考えるということには共感できる。特に低学年の子どもはそれまでの経験の乏しさや発達段階から、新しいものへの興味に移りやすく、年間を通しての課題と出合い、そこへの追究意欲を継続させていくことは難しいといえる。このことについて藤川提案では「問い」につながる自己評価として、振り返りカードの継続を方策として掲げている。ここでは、記述式の自己評価に対して、積極的に保護者のコメントを取り入れるなど学びの日常化を目指しての支援を行っている。25分という短い学級創造の時間の中で学級全員の具体的な姿を見て取ることは難しいが、振り返りノートを活用すると、子どもの記述の中から問いや価値につながる思いを見て取ることができる。藤川提案ではさらに、一人一人に「マッピングの途中経過」をもたせることで個々の問いの自覚化を促したり、物事を集団で解決する喜びを自覚できるようにしたりしていた。確かに「なぜ？」という強い思いは問題解決の原動力となる。今後は、それが子どもの中から自然に生まれるよう教師の出方を考えていく必要がある。

成果と課題

- 生き生きと語る子どもの姿から、教科学習や創造活動の学びを支える支持的風土の重要性を改めて感じることができた。
- △ 本時は子どもたちの既存の価値や、新たな活動によって生み出された価値が見えにくかった。学級創造活動における子どもの認知過程について、縦割り創造活動との共通点や相違点を探りつつ支援に生かしていくことが求められる。

2年 学級創造活動 活動名「『なぜ?』が続くために」

支援者 藤川 史菜 先生

本校1年目の藤川先生らしい、試行錯誤のつまった授業でした。個に寄り添うとはどういうことか、教師の出番はどうあるべきか、改めて考えるよい機会を頂きました。子どもたちの熱心さが伝わってくる25分間でした。

【子どもの活動】

- 1 これまでの活動を振り返り、悩みのある児童を紹介する。
- 2 マップをもとに、これからの活動に必要なことについて整理する。
- 3 それぞれの探究活動を行う。
- 4 色シールを使いながら自己評価を行う。



友達の悩みを全体で共有する



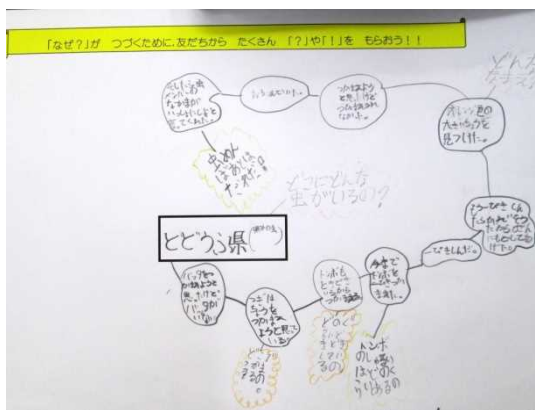
これからの活動に生かす視点を話し合う



図鑑を見て調べ学習を進める姿



友達と一緒に虫を捕まえ観察する姿



子どもが描いたウェビングマップ



毎時の振り返り

(文責 橘 慎二郎)

【藤川先生コメント】

今あるもの、今していることを当たり前と思わず、何で? どうして? もっと知りたい! もっと関わりたい! と、わくわく感が続く子どもを育てたいと思い、学級創造の時間を過ごしています。素朴な疑問から「問い」を持ち、私も子どもと一緒に質の高い「問い」作りを目指していきたいと思います。今後は、研究会へ向けて、マッピングによる具体化が話し合いにつながるよう検証していきます。参観、討議でのご意見、ありがとうございました。